

## 残念な選択

庄野 統夫<sup>\*1</sup>

Shono Muneco

随想・展望を書くようにとの話をいただき、何を書こうかと考えた。候補としては福井で生活を始めることになったので、福井で知り得たことが頭に浮かんだ(邪馬台国越前説、蕎麦やお米が美味しい福井、恐竜王国等々)。しかし、この紙面を占めるには、まだまだ情報が乏しい。そこで人生を思い起こしながら、何か教訓めいたものを探し、書き起こそうと決意した。もちろん衰えてきた脳で、記憶が美化されて補完されている部分もあるかもしれないがご容赦いただきたい。

幼少時、私はお小遣いをもらった記憶が無い。欲しいものがあれば都度申請してお金をもらうのが我が家のルールだった。幼稚園の頃だったと思う、当時流行りのアニメ(マジンガーZ)のカードが欲しくて、「カードが欲しいのでお金ちょうだい」と申請。目的のカードを買って帰ると現物を見た親は幼稚園児の私を烈火のごとく叱りつけた。親の論理では、カードとは単語帳のようなものを意味し、勉強するためにお金を申請したと喜んだようだ。

その経験から、目的語を正確に相手に伝えなかったという問題点を理解し、コミュニケーションを大事にすることを身につければ、もっと素晴らしい人生になったであろうと今なら思う。しかしながら、それ以降、私は親に申請した記憶が無い。気が付くと、必要なお金は自分で稼いでいた。といっても小学校に入る前なので、新聞紙や、空き瓶、屑鉄などを集めて、近くにあった買い取り業者に持っていき、数百円のお金をもらう程度だったが、駄菓子屋で豪遊する限りにおいては十分だった。

目先の利益に走り、せっかくの学ぶ機会を逃してしまった、残念な幼少期であった。

小中学校時代は、大阪、奈良を軸として数度の転

校を経験した。教育者であった親が、実際に住んでいる場所は変えずに都度、学校の近くに住居を借り、住民票の移動だけするという荒業で「孟母三遷の教え」を実践した。通学時間は電車で約2時間の毎日で、趣味は必然的に読書になった。SFものや推理小説、歴史小説を週に2~3冊のペースで乱読し、科学的、論理的なものへの憧れ、義侠心、矜持等の人として在りたい自分など、その後の人生の選択に影響を与えるものを得たと思う。しかしながら、本を何百冊も読みあさった結果、知識は増えたものの、いつしかさまざまなことを侮る気持ちも芽生えた。その後、学ぶべき時に学ぶべき書物さえ馬鹿にして読まなくなり、残念な自分になっていた気がする。一方、幼少期に憶えた小遣い稼ぎは手段を変え継続していた。この頃は、記念通貨や記念コイン、テレホンカードの転売だった。中学のある時期は、この世から欲しいものが無いという感覚になるほどお金を得たことを憶えている。この感覚は、欲や情報が少ない中学生ゆえに得られたものであるが、ある種の悟りめいたものだった。この悟りめいたものは、利益の飽くなき追及よりも、「吾唯知足」的な、「ほどほどで良いではないか」という精神を育ててしまっていた。

高校時代には、何かの理由で親と口論し、最終的には「家から出ていけ!」と言われた。よくある話だと子供が親に謝って済むが、私の場合は自活できる自信もあり、すんなりと家を出た。当時は住む処と朝夕の食事を提供してくれる『新聞奨学生』という制度があり、それを活用させてもらった。朝は2時半起きで、夜は9時に就寝。規則正しい生活環境を身につけた。ついでに学校では授業中に起きているふりをしながら熟睡するという、残念な習性も身につ

\*1：高嶋技研株式会社 代表取締役社長

いた。

その後は、縁あって防衛大学校に行くこととなった。ここでの生活は人生最大の苦行であり、授業中に熟睡する技が無ければ4年間を過ごすことができなかつたと思われるほどであった。しかし苦しかったがゆえに得たものもあった。極限状態で人がどう変わるのかを目の当たりにし、人の本質の多様性を知った。人は成長と共に色々な仮面や鎧を着こむが、極限状態に陥ると意味をなさず、素の人間性が現れる。そして素の人間性がぶつかる中、助け合うことができた者だけが友となる。

そんな友に言われてつらかった言葉がある。共に進んでいくと信じた道を違える時に発せられた「なぜ辞めなければならぬのだ？」その言葉にすら自らの決定を覆そうとは思わずに青臭い正義を振りかざす未熟だった自分が残念で仕方がない。

この後は、しばらくの無職期間を経て現在のIHIに入社し、色々な人にぶつかりながら、角が少しずつ削れ、今では人並みになれたのではないかと思っている。

当たり前だが、人生は選択の連続であり、常に道に迷う。何が正解だったかは終わった後にしか評価ができない。ならば「選んだ道を後悔しないよう最善を尽くす」という姿勢が一つの回答かと思う。

とはいえ自ら選択し続けるのは容易ではない。不本意ながら従わざるを得ないことや、逆に天の采配とも思えるような偶然もある。そんな時、全てを受け入れるべきだとは思わないが、選ばなかった選択は、試練となって、乗り越えるまで何度も巡ってくる(ような気がする)。ならばどうするべきかという、年齢に応じた適度な試練を乗り越えていく選択

をしていくことをお勧めしたい。我々の多くは集団の中で生活するが、集団生活では人は助け合って生きていくためにお互いにさまざまなことを依頼し合う。その際、依頼する側は、相手の人となり、年齢や言動、あるいは役職で、どのような経験をして何を乗り越えて来たかを想像し、力量を推測して依頼する。ここで推測と実力にミスマッチが生じ、お互いに苦しい思いをしないためにも、年齢に応じた試練を乗り越えていることが必要なのである。

現代は、色々なものが発達し、人に優しい世界になった。ともすれば、何の選択もせず、あらゆる試練を避けても生きていける(かもしれない)。でもそうした場合、当然できるであろうと思われることもできない自分に直面する(かもしれない)。結果、自己嫌悪に苛まれることになる(かもしれない)。

聖書の一説に「神は乗り越えられる試練しか与えない」とあるが、これは正しいと思える。人が与える試練は、周りの配慮によって程度が限られる場合が多いからだ。また「迷ったら困難な道を選べ」も、ほぼ正しい。そもそも自分ができそうもない道は選択肢に出てこず、困難と感じたとしてもできる範囲が多いからである。仮に失敗しても、次回に活かせば良い。また真摯に取り組んでいけば差し伸べられる助けの手もある(かもしれない)。

案ずるより産むが易し、成長の機会を逃さずに行きましょう(自戒)。

最後に、さまざまな場面で、助けてくださった皆さん、ありがとうございました。私も誰かの助けになるように、残された時間を使っていきたいと思えます。



高嶋技研株式会社  
代表取締役社長

庄野 統夫

TEL. 0776-74-0880

FAX. 0776-89-0888